

残暑お見舞い申し上げます！

先日、国際ことば学院に通う留学生の日本語スピーチコンテストに出席した。静岡市にある国際ことば学院は海外、特にアジアからの留学生が大半で、学生数は現在300人を超える。留学生の視点からみた日本像は思いもよらぬ気づきや感動を与えてくれて、楽しいながらも示唆に富む。特にベトナムの留学生の「日本はこんなに平和なのに、なぜテレビで殺人を扱うドラマが多いのか？」という疑問が心にひっかかった。

確かに日本のテレビは刑事物や病院物……人が死ぬドラマばかりだ。そのうえ昨今はドラマ以上の事件ばかりで暗澹たる思いになる。なかでも、いつも不思議に思い、嘆かわしく感じるのは、事件報道の現場で居丈高に振る舞う新聞記者やテレビのリポーターの存在だ。被害者、容疑者の家族に執拗に迫る姿は常軌を逸している。そもそも容疑者はまだ容疑の段階にすぎず、警察発表やリーク情報で一方向的な報道をすることが本当に正しいのだろうか。

感情に訴える報道は、時として社会を誤った方向へ導く。愛国心や民族感情に訴える報道が国を誤った方向へと導くことを私たちは忘れてはならないだろう。民主主義は多数決によって結論を導き出しますが、多数決意見がいつも正しいとは限らない。少数意見を尊重し、謙虚に耳を傾ける姿勢が重要だ。報道の役割は、冷静な論理の力によって権力者の横暴だけでなく、大衆の暴走にも歯止めをかけることにもあるはずだ。

インターネットの普及によって、報道機関の持つ力は低下しつつある。新聞やテレビなど従来型のオールドメディアはネット上では「オワコン」(＝終わってしまったコンテンツ)と呼ばれ、衰退していくメディアという認識が強い。

誰もが手軽に情報の発信者となり、その情報が検証されることもなく拡大増幅していくなかで真実を見つけ出すためには、何よりも発信者の信頼度を見極めることが重要になるのではないだろうか。その意味では朝日新聞の従軍慰安婦報道はその信頼を根底から覆したとあってよいだろう。ちなみに、私には朝日新聞より信頼できる友人がおり、その友人から従軍慰安婦についての情報を得ることができていた。

私はどんな時でも少数派や逆の意見に耳を傾けるようにしてきた。そのおかげかどうかはわからないが、大きな声と猫なで声には必ず違和感を覚えるものである。

静岡県議会議員
天の一